

日明文化交渉の一斑

福嶋俊翁

日本と明国との往来は明の太祖（朱元璋）が洪武元年（一三六八）に使を遣わして我が国の事情を明らかにしようとしたに始まる。それは「明史」日本伝に「洪武二年三月、帝は行人楊載を遣して日本に詔諭し、詰るに入寇の故を以てす。謂へらく宜しく入朝して我が朝廷に來れ。然らざれば兵を修めて自ら固くせん。倘し必ず寇盜をなさば、即ち將に命じて徂^ゆぎ征たしめんのみ。王其れ之を凶れ」と記されたような強硬な明国の態度であった。日本では此の時、明の使者五人を殺し、楊載・呉文華等を三か月間拘留したのであった。

洪武四年（一三七二）の冬、「日本国王良懷（当時征西府將軍であった懷良親王のこと、其の僧祖來を遣し、表箋を進め、馬、方物を貢す。並に僧九人來朝す」と明史にあるが、それが日本から明国に入貢したという初めであろう。

爾來明国三百年の間に於いて日本の僧侶で入明した者は非常に多く少くとも百余人を降らないのである。而して其の入明に就いては室町幕府の使命をうけ、正使或は副使に任ぜられた公人と、個人的に仏教の研究或は中国文化の修得のための人々と二種に分けられるようである。

相国寺の景徐周麟（二四四〇—一五一八）の「翰林胡蘆集卷七」に出ている「送貞友竹遊大明国序」を見ると、

中華には初め勘合の信無く、往来する者、各々其の志に従へり。永楽の後は勘合を以て符信と為す。表文を捧げず、勘合を持たざる者は禁じて入れず。一たび入る者も其の留まること僅かに一年を歴るのみ。(五山文学全集第四卷)

といており、また同じ相国寺の周鳳瑞溪(一三九二—一四七三)が文明二年(一四七〇)に著わした「善隣国宝記」には

古より両国商舶の来るもの往くもの、海上相望む。故に仏氏たる者、大は則ち化を行ひ道を唱ふるの師、小は則ち方に遊び法を求むるの士、各々其の志を遂ぐ。元朝信を絶つの際も尚爾り。況んや其の余をや。勘合有つてより以来、使船の外、決して往来無し。恨む可き哉。

とあるのを見ても、永楽年間に結ばれた勘合貿易(使者使命の真偽を校勘するために押印して両分した切符を發給して貿易する所の条約)は、日本僧が自由に入明する上に大いなる支障を来たしたものであった。然しこれには例外もあって、東福寺栗棘庵の惠鳳翽之の「竹居清事」に出ている「奉贈九淵禪師遊大明国序」の中に

禪師は南遊に志ある者久し。今茲入貢の船あるに方り、乃ち名を使臣士官の列に匿し姑く以て其の夙志に醜いしなり。蓋し其の志の在る所あって存す。浅徒の覬覦す可きに非ざる也

というような事実も稀にあったようである。官使としてでなく求法のために入明した僧侶は在明の期間が比較的長かったので、彼の地の文化の移入に大いなる力があつた。就中応安元年(一三六八)に入明した絶海中津(一三三六—一四〇五)や汝霖良佐(後妙佐と改む)の如きは最も著名である。

汝霖は永和四年（一五七八）に絶海と共に入明し、在明十一年にして帰朝したのであるが、在明中蘓州の承天寺において箋翰を掌り、鐘山では五山の諸老と共に大藏經を点検した人である。師は文章に長じ其の文稿の高園集には当時翰林学士として有名な宋景濂（明史、一二八、本伝がある）が跋文を書いて、

右日本沙門汝霖為る所の文一卷、余之を読んで再に至る。其の史に出で經に入り、旁ら諸子百家に及ぶを見、固より已に其の博瞻を慕す。辞を遣るに至って又能く舒徐にして迫らず、豊腴にして雅に近し、益々其の賢を歎ず。頗る其の是を致す所以の者を詢ぬるに、蓋し来つて中夏に遊ぶ者久しく、凡そ文章鉅公に遇へば、悉く之に趨事す。故に其の指教を得、深く規矩準繩を知つて、能く文字をして職に従つて難なからしめしなり。汝霖は今鯨波に汎んで東に還る。文を以て其の国中に鳴らんこと蓋し疑なからん。嗚呼汝霖は禅家の流なり。諸相を蕩空し、五蘊四大を視て、猶お土直と為す。況んや身外の文をや。苟し此に執して遷らざれば或は將に道と相違はんとす。然りと雖も汝霖は徧ねく名山に参じ、禅觀に精しく、其の此の義に於ける未だ嘗て之を知らずんばあらず。特り如幻三昧を以て翰墨の間に游戲するのみ。翰墨に游戲するは難きに非ず、而も其の心を空にするを難しと為す。所謂心空なれば則ち一切皆空にして諸の世諦文字を視るに、粗迹ありと雖も、而も本より粗迹無し。仮名有りと雖も、而も実には仮名無し。惟一惟二、惟二惟一、初より何ぞ道を礙げんや。汝霖の文を觀る者、又当に此に於て之を求むべし。汝霖名は良佐、遠州高園の人。姓は藤氏、嘗て蘓の承天寺に掌書記となり、繼いで五山の諸大老に同じて鍾山に入り毘廬大藏經を点校す。其の同袍皆畏れて之を愛すと云ふ。

（跋日本僧汝霖文稿後。隣交徵書二篇卷之一）

といている。今日汝霖の文稿の全体が伝わらず、明朝風の四六文の疏稿たる汝霖佐禪師疏（高園藁）一本が建仁寺塔頭阿足院に現存する。汝霖は絶海と共に天授四年（二三七八）に帰朝し、足利義満の建てた城西の宝幢寺に住したが其の後の消息は明らかでない。

応仁二年（一四六八）遣明正使の天与清啓の随員として選ばれ、四十一歳で入明した人に、桂菴玄樹（一四二七—一五〇八）がある。桂菴は島蔭又は海東野釈と号し、周防山口の人で幼にして上洛、南禅寺の得巖惟肖に就いて儒釈の書を学び其の衣鉢を伝えた。入明して公務を果たした後、儒学の研究の爲めに中国に留まって、当時文学の淵叢地として知られた蘓州・杭州の地方に遊歴し、大いに見聞をひらき、劉洪・盧瑀・宗頭俊光、金亮難闇・俞沢、鮑垣、沈湯、方震、張珮、俛鑰等の明儒と交遊し、朱子学を修め来たったようである。師は後年儒書を説くに当って、書経には蔡沈の伝、四書の講義には倪士毅の輯釈の説を用いているが、それは当時明儒の間に盛行した学风を受け伝えたからであろう。桂菴の帰朝は文明五年（一四七三）であるが、一旦使者としての報告を済ましてから戦乱をさけて九州を歴遊し、熊本菊地氏の厚遇をうけ、後さらに薩摩の島津氏の招きに応じて文明十年（一四七八）、島津忠昌が桂菴のために創立した島陰寺（桂樹院ともいう）に住し、忠昌に書経蔡伝の講義をしている。其の頃薩摩は禅宗が盛んであって文学ある士人の多くは桂菴を歓迎してその講席は常に盛況を極めたのであった。桂菴は薩摩に在った時代島津氏の国老伊地知重貞と謀って朱子の大学章句を刊行した。之は日本における朱子の書の出版として最初のもので、文明十三年（一四八一）六月のことである。世に之を文明版大学或は伊地本と称する。この大学章句は日向薩摩大隅の三国の間に盛んに行なわれたから十余年後にはその版木が磨滅するに至ったので伊地知重貞は延徳四年

(一四九二)十月、改めて桂樹禪院から再版している。之が延徳本大学と言われるものである。(大正十四年西村時彦博士によって影印されている)この延徳本は大学の本文と朱子の章句とを同大の文字とし、章句を一字下げているだけである。これは朱子の註と本文とを同時に読まずべく作られているのであって、他の薩摩で刊行された経書も同じ形式を踏んでいる。如何に朱子の説を尊んだかが之からも知り得られる訳である。桂菴は実に深く朱子学を尊重し

フスンチウ スコンビイコウ カンシヤンシヤウ ルシシヤサ
不宗朱子元非学。看到匡廬始是山

という明国学界の常套語を掲げ、自ら四書を授くるに当って「家法倭点」なるものを以てした。家法倭点は桂菴が文亀元年(一五〇一)に国字で四書の朱子註を説き、和点の法を述べたもので、今日から見れば極めて簡単な内容と思われるものであるが、当時これが宋学の流行を促進せしめるに絶大な力となったことは疑えない。今日この書には二種の伝本があり、一は慶長十六年(一六一一)九月七日俊正という人の奥書のある写本で表題は

四書五經古註与新註之作者並句読

となっているもの、他の一は桂菴の学統を嗣いだ如竹散人が寛永元年(一六二四)に江戸で刊行した「家法倭点」と題するものである。二者のうち写本は刊本よりも内容が多いところから考えると如竹本は写本の要点を摘録したものである。何れもこれは桂菴が朱子学の由来や四書の説法を門下に授けた筆記で従来の訓法を正したものである。

桂菴は明応九年(一五〇〇)建仁寺の二百四十世をつぎ、其の後南禪寺から招請されたが上洛せず、文亀二年(一五〇二)鹿兒島城外の東帰庵に退居し、永正五年(一五〇八)薩摩の太守忠昌と同年に八十二歳で示寂したのであるが、その薩摩に三十一年間在任し関西の村夫子を以て自ら任じ、禅余程朱の学説を其の徒に授け、門下には薩摩侯島津

忠昌を始め其の重臣の外、釣雪玄甫・鄂渚玄棟、玄章、月渚永乘、一翁玄心、雲巖崇沢、舜田耕翁等の諸禪衲が多かった。師は宋学に精通したのみならず、桂菴の文集である島陰集の序に明の洪常（子経）が

今天子弘治と改元せるの八年、日本国復讞して来朝す。舟、吾鄞江の上りに次る。一日客あり、其国南禅寺の僧桂菴の嶋隱集凡そ若干万言を持って、予に詣る。華語を解せず、紙筆を索めて以て予に告げて曰く、桂菴は吾国縉流中の翹楚なり。内典に精しく儒書に通じ、旁ら莊列に及ぶ、一として心を究めざるもの無し。成化四年、上国に觀光し、華の大夫士に従って遊ぶを得て、其の未だ能せざりし所を益増す。帰って乱を避けて豊筑肥の三州に居る。凡そ其の性情を諷詠し応酬干求の作、皆是に在り。終に薩州の麴嶋に居る。故に島隱集と名づく。敢て大人先生の一言を丐ひ以て之に序とせん。儻し不拒を蒙らば其の榮幸たる、曷ぞ言ふ可けんやと。予嘗て其の紀夢遇旧の作を見るに、能く曲さに離索の意を尽せり、則ち固く心に之を敬せり。是の集を觀るに及べば、則ち誠に華の作者及び其国粟田齋然の下に在らざるなり。嘉す可きのみ。乃ち辞せずして序を為り、以て之を帰す。

と書いてゐる如く、弘く内典儒書諸子の学に通じていたのである。また明の嚴克正も

桂菴玄樹禪師は釈典を精究し、旁ら四書百家子史に通ず。尚書に於て尤も心を究む。吾陝尚書は往々皆古注に従ふも而も禪師は独り晦菴朱夫子に依れり。門人の伝と後の講解とはこれを掌に指すが如し。誠に日本縉流中の巨擘なり

と推称してゐる程であり、辞藻に於いても当時劉洪や盧瑀の如き明人をして唐人の風ありと嘆賞せしめてゐる。江

戸末期の儒者佐藤一斎が凡そ二百七十年の後(天保十三年)師の頂相に賛し

吾道一貫 無隱乎爾 身披禪衣 心服闕里

洛派東漸 寔自師始 心月千古 桂影遠被

と題しているのは実に其の要を得た詞であろう。桂菴の著には島陰集(島隠漁唱ともいう)三卷。島隠漁唱文集一卷、島隠雜著一卷、桂菴家法和点、南游集等があり、南游集はその在明時代の詩文を収録したものであったが早く佚して伝わらない。

なお入明した禅僧には画僧として有名な雪舟等楊があり、別に了菴、策彦等等幾多の名柄が数えられるが、ここには後の二者を挙げることにする。

了菴桂悟(一四二五—一五一四)

伊勢の人三浦氏、別に鉢袋子また堆雲と号し、京都真如寺の大疑の法嗣、のち東福寺に出世(一七一七)し後土御門天皇の信崇を得て其の法間に答え、了菴の二字を書し与えられ、永正三年(一五〇六)には後柏原天皇から仏日禅師の号を特賜され、永正六年八十三歳の高齢で遣明正使となったが海風のため一旦帰東し、永正八年(一五一一)入明し、明使の抑圧に対し強硬に折衝して使命を辱めなかった。壬申入明記は当時の日記である。明国では了菴の高徳を歎賞し、武宗皇帝から金襴の法衣を賜わり、詔によって育王山広利寺に住し、在明中、公卿縉紳の間にその道徳を慕われ多くの学者と深く交わる所があった。永正十年(一五一一)帰国するに当って彼の地の士大夫で送序を寄せる人が多かった中に、彼の有名な大儒王陽明が「送日東正使了菴和尚帰国序」なる一文を寄せている。今ここに

卑藏の王文成公四百年記念として景印した真蹟本によって煩を厭わず全文を読み下してみる。

八

日東の正使了菴和尚の国に帰るを送るの序

世の奔競を悪くんで煩拏を厭ふ者は、多くは逐れて積に之く。積と為るに道あり、清と曰はずや。撓れて濁らず、潔と曰はずや。狎れて染まず。故に必ず息慮して以て塵を洗ひ、独行して以て偶を離る、斯ち其の道に詭かずと為すなり。苟しくも是の如くならざれば、則ち其の髪を皓くし其の衣を緇くし其の書を梵にすと雖も、亦た租絲を逃るるのみ縦誕を樂しむのみ。其の道に於ける如何ぞや。今日本の正使堆雲桂悟字は了菴といふ所の者、年上寿を踰えて、学を為すことを倦まず、彼の国王の命を領し、来つて珍を

大明に貢す。舟、鄞江の濳に抵り、館に駟に寓す。予嘗てここに過り、其の法容潔脩律行堅鞏にして一室に坐し経書を左右にし鉛采自ら陶するを見る、皆楚楚として観愛す可し。清に非ずして然らんや。之と空を舟ずれば、則ち所謂預め諸殿院を修せしの文を出し、教の異同を論じ以て吾聖人に並ぶ、遂に性閑情安、譁にして以て肆ならず、淨に非ずして然らんや。且つ来つて名山水を得て遊び、賢大夫にして従ひ、靡曼の色、目に接せず、落哇の声、耳に入らず、而して奇邪の行、身に作さず。故に其の心日々に益々清く、志日々に益々淨く、偶々離るるを期せずして自ら異り、塵澆ふを待たずして已に絶つ。茲に帰思あり。

吾国之と文字して以て交る者、太宰公及び諸々の縉紳輩の若く、皆文儒の択なり。咸其の去るを惜しみ、詩章を為つて以て迴躡を艶飭す、固より貸して濫る者に非ず。吾安ぞ序せざるを得んや。

皇明正徳八年歳癸酉に在るの五月既望

余姚王守仁書す

了菴と王陽明との交渉の時処等についての考証は、久須本文雄氏の著「王陽明の禅的思想研究」を参照されたい。了菴の帰朝に際して盧希王、楊端夫が送別の詩を送り、浙江の提督黃相は「日東了菴禪師の職を育王寺に転ずるの疏並に序」を製し

了菴は異域叢林の彦なり。僧臘八十余、顰眉鶴髮、動止雅恂、尤も言咲を苟くもせず。清齋習靜の余、經典の秘義を默究するのみ。初本国に在りて大檀越征夷大將軍、瑞龍山南禪禪寺の丈室人に乏しきを以て特に命じて之に主たらしむ。緇流允服す。頃ろ國王の命を啣み、遠く中華に使し、声名文物の盛を窺ふことを得たり。寧波に育王寺あり琳宮梵宇、金碧煌煌たるを聞き、乃ち職を此の寺に転じて居る者之を久うし、大いに教典を脩む。寧波の府衛諸官僚も亦た其の能く迦葉に墜ちし像教の中、人あるを喜ぶ。予故に之が疏を為る（鄰交徵書二篇一）

と述べており、四川按察副使四明の黃隆は了菴の社友東帰座元の齎した了菴の語録の序文を求められ

余之を覩ること三再、余も亦た嘗て心を積学に究むる者、覚えずして心目豁然、自ら其の倦むことを忘れ、手より積つるに忍びざる也。嗚呼休い哉。（鄰交徵書三篇一）

と推称し、四明山人張迪も「了菴語録の後跋」を書いて了菴の才徳を語っておるものがある。

了菴は帰国後南禪寺に再住し、自らその山門再建に衣資を投ずるなどしているが最後は東福寺内の大慈院に隱退し、九十一歳を以て寂した。

別号を怡齋、後改めて謙齋といった。天龍寺内の妙智院の第二世心翁等安の弟子である。少年の時代から詩文の天才を発揮しているが天文七年(一五三八)周防の太守大内義経の外護の下に、足利義晴將軍の命によって三十八歳で遣明副使として、その翌年正使の博多聖福寺新篁院の湖心碩鼎と共に寧波に到り、天文九年三月参内し即座に応制の詩を呈した。

万里使星朝奉天 五雲捧上玉楼前 猷君唯以無疆寿 我是日東蓬島仙

策彦は在明中、彼の地の秀才と相交わり、陳白沙集、真西山讀書記、張文潛集、郁大有雪窓心論等の書を得、天文十年(一五四一)帰朝したが其の帰航中は常に「文献通考」を繙読していたという。天文十六年(一五四七)四十七才遣明正使として第二回目の入明をなし、世宗から北京城に迎えられ唱和の詩を賜わった。

熟路洋中船戮輕 天書早召驗吾誠 禁池再浴恩波水 弊垢袞姿影尚清 策彦

姓氏声名俱不輕 曰謙曰策尽其誠 前来錫杖今杯渡 戒律再三如水清 世宗

天文十九年(一五五〇)帰朝するや後奈良天皇は遠行の勞を慰めて宴を賜い、織田信長は其の徳を慕うて城中に請じ、中国の政治、人物、山川等の状を聴取し、甲州の武田信玄は師を敬信して長興寺恵林寺に迎え住せしめ、更に一寺を創建して請ずるも固辞して赴かず、信玄自ら弟子の礼を執ろうとしたが辞して他に譲るといふこともあった。第一回目入明の日記を初渡集、二度目のを再渡集といい、当時の外交の実情を知り、寧波や北京の地理風物人情を知る好資料である。這般の文献に關しては牧田諦亮博士の「策彦入明記の研究」上下巻が最も詳しい。策彦の著には

策彦和尚詩集、謙齋雜稿、謙齋疏稿、城西聯句、九千句、蠡測集等があり、策彦と交遊のあった中国の文人で策彦に関する幾多の詩文があるが今はそれに及ぶ違を持たぬ。

以上の人は著名な一二に過ぎぬけれども五山の禅侶で入明したものは非常に多く、其れ等の人々は帰国に當って儒典史書詩文集などの多くを將來したのみならず、彼の地の名柄大儒について仏寺の塔銘、頂相の贊、語録文集の序跋等を請うて持ち帰ることを光榮とし、之が我が国五山文学の上に影響刺激する所尠しとせぬものがあつた。

来朝の明人

明初に騒乱を避けて日本に流寓し、また倭寇に拉致されて来朝したものが多かつた。それ等の中には遣明使の通事として使われた者もあつたと思われるが、尤も来日した明人で日本文化の助成に貢献した人は彫刻工であつた。義堂周信（一三二五—一三八八）の日記空華日工集に

唐人刮字工陳孟千、陳伯寿二人来。福州南台橋人也。丁未年（貞治六年）七月到岸。大元失国、今皇帝改国為大明。孟千有詩。起句云、吟毫玉兔月中毛。（応安三年九月廿三日の条）

とあるのを見れば、彼の地の印刷工の陳孟千や陳伯寿は元末の乱で失職して渡日し、日本の開板事業に与つたのである。当時開板事業の最も盛んであつたのは五山の禅利であつて、語録・詩文集・僧伝・儒書などの出版、世にいう五山版なるものがそれである。天龍寺が開創の翌年から四十年間に亘つて、夢窓国師の法嗣、春屋妙葩が監督となり、足利尊氏・直義・近江の佐々木氏頼其の他の大名の援助によって刊行された臨川寺版なるものは、主として是等明の帰化人の手で印行されている。其の頃の彫工で有名な人は陳孟榮で、宗鏡録、平石如砥禅師語録、禅林類

聚、蒙求等の書が翻刻されている。古版宗鏡錄第百卷二十五冊の識語に

応安辛亥結制日 天龍東堂春屋妙葩命工彫之 江南陳孟榮刊刀

と書かれ、宗鏡錄の版心に毎巻彫工の名があつて三十余人に及んでいるのを見ると印行には相当数の人が従事していたことが解る。この陳孟榮と並んで俞良甫という人が居る。彼は凡そ二十五年間、開版事業に尽した彫工で福建道興化路蕭田県仁德里の生れ、嵯峨に居て多年苦心して般若心経疏(応安二年^{一三}春出版)月江語録二冊(応安三年六月)碧山堂集一冊(応安五年八月)李善注文選六十卷(応安七年十月)唐柳先生文集二十冊(嘉慶元年^{一三}無量寿禪師日用清規一卷(刊行年時不詳)等、多くの典籍を出版した。李善注文選の奥書に

於日本嵯峨自辛亥(応安四年)四月起刀至今苦難始成矣。甲寅(応安七年)十月謹題

とあるように非常な苦心を要したことが知られる。また伝法正宗記の奥書に

福建道興県仁德里住人俞良甫、於日本嵯峨寓居馮自己財物、置板流行、歳子孟夏四月謹題

と記しているのを見ると、至徳元年(一三八四)四月に出版されたこの正宗記は俞良甫が私財を擲つて刊行を計ったことが知られる。この外、福・才・林・沈・元・月古などという人々が、陳孟榮や俞良甫を助けて出版に努力していたことも、亡命の明人か我が文化の爲めに寄与した忘れ難い功績であろう。右のように彫版工の渡来以外に国命を奉じて日本に使した明の僧侶達があつた。それは明国の政策として日本が仏教国である所から、宗教の力を借りて当時中国の辺境に出没し恐れられた倭寇なるものの勢力を勦滅しようとする意図から出たものらしい。「明鑑」の明太祖の条に「良懷は僧の祖來を遣はし表を奉り自ら臣と称し、方物を貢す。帝は之を嘉し、其の使者のために宴

を賜ひ、又日本の仏教國たるを以て、僧祖闡等に命じて彼を送りかへさしめ、賜与甚厚なり」と言っているようなことがあった。然るに日本では祖闡を拘留し二年の後に釈放した。之は政治的には失敗の如く見做されているが、反って文化的には有利な結果を生んでいるのである。それは祖闡が二か月京都に留住した間に、日本僧と交わり詩文を改削したり詩序を撰作したりして当時の五山僧徒の文学に資する所があったからである。この祖闡仲猷は嘉興府天寧寺の住持で文中二年(一三七三)明使として来朝したのである。室華日工集に義堂周信は

(心齋中樹)

樹中心出示寄春林詩軸、大明勤無逸序、以余詩白雲千疊人何在、黃鳥一声山更深之句而為美、且序中及余名、

又寿福宗俊侍者、近来自京、出空谷応首座書、々中説云、大明使節瓦官講師畧闕足下序跋等文藁、毎々対人稱揚極口、但以未多見古・律詩而為恨云云、(応安六年八月廿三日の条)

と記し、また至徳二年(一三八五)二月廿日の条に

雪溪号序、大明瓦官無逸作記、梅洲老人中岩作説、余嘗在関左、有客伝公命、俾余為説、今亦為之序云、

(克勤)

(円月)

と述べているから明の使節の金陵瓦官教寺の住持無逸克勤の如きも詩軸の序文などを書いており、五山僧の文学を刺激する所があったと思われる。

また応永九年(一四〇二)に来朝した天倫道彝(禅僧)・一菴一如(教僧)の如きも六か月の間京都に留住し、その詩文書札が日本僧の間に珍重され、東福寺の岐陽方秀(一三六一—一四二四)は書翰を天倫と往復し、自分の別号である「岐山」の字説を求め、

去冬謹んで祖阿をして岐山字説を求めしめしに、辱くも法語を賜ふ。喜躍の至りに勝へず。十襲して以て至宝

と為す(不二遺稿、与天倫和上書)
とい

今又謹んで法偈及び禅註原人論等を領す。和上啓発の功、焉より大なるは莫し。携へ去つて披誦し、以て海国
徧地の陋を滌ぐなり

とて深い感謝を捧げている。また一菴に對しても

秀嘗て法廬の本国に入るを聞き、即ち安下の処に趨詣し、百拜求教の私を伸べんと欲せり。而るに官禁稍や厳
しく、僧人の和尚の門に来往するを許さず。只徒らに仰慕するのみ。伏して慈察を乞ふ。茲に辱くも不二室銘
を賜はる。奥旨深義、其の仏隴の正伝と為すに愧ぢざるなり。伏読長詠、益々欽歎を増す。顧るに余や至つて
愚、極めて陋、何ぞ是の如きの至宝を獲んや。又岐山の詩と序との藁已に成り了ると承る。輒ち唐紙一張を納
る、重ねて寵製を賜らば、吾に一身を光耀するのみならず、実に本国千歳の幸なり。秀戦汗の至りに勝へず
(不二遺稿、与一菴和尚書)

と言つたような鄭重を極めた書翰を送つて自らの室号たる不二室の銘を得たことや、自分に対する岐山詩序を得る
喜びを表白しており、更に

大和上幸に本国に入る。学者の久しく織疑細惑を懐くが如き者も、亦た宜しく決を求め信を後世に取るべし。
然れども語音同じからず。官法も亦た蔽し。敢て輒ち謁を法住席下に通ず可からず。只徒らに欽慕して已む。
秀暇日經論を披閱し、疏鈔を索搜し、以て禅觀を助く。然るに器識闇短にして解せざる所多し。聊か数条を録

して開發せられんことを求む。一一教示されるれば至幸に勝へず

と好學に燃ゆる熱意を吐露して教を乞ひ、次の疑問、仮えば

一問、金剛般若經注解は無着天親の論判に依ると雖も。面は北峰の新解を述ぶるに似たり。然らば則ち稜伽も亦た所述有りや。

一問、永明の宗鏡録は標宗問答引証の三章を列すと雖も、而も逐章文義浩濶にして読者望洋として若に向ふ。願くは大節を分つて以て大義を示されよ

一問、清淨法身毘盧遮那仏等の十念は、誰人の製する所、何れの經文に出づるや

などと言う十ヶ条を列挙して垂教を望み、華嚴清涼國師大疏など五部の書を商船に付して日本の學者の爲めに惠贈されることを願うなど岐陽と天倫・一菴との間の此の様な學的交渉は當時の一斑を物語るものであるが遣明使たちが中国の典籍類を將來した數の夥しいものがあつたことは今更言うを俟たぬ。文明八年（一四七六）遣明使から要求した書目の中には

仏祖統記、法苑珠林、賓退録、逐齋閑覽、類説、百川學海、北堂書鈔、老學菴筆記、石湖集

などか挙げられ、帰朝僧の持ち帰つたものの中には秘簡珍籍墨蹟の類も相当に多く、我が國の文運に清新の氣を加え与うるものがあつたことを多とせねばならぬ。

以上は主として文學的思想的方面における日明文化の交渉の一部を一瞥摘記したに過ぎぬけれ共、別に医薬・工芸・建築など多方面に亘つて中国の知識をこの時代に吸収しているのである。浙江金山の侯繼高の編した「日本風

土記」に、

五経を論ずれば則ち書・礼を重んじて、詩・易・春秋を忽にす。四書を論ずれば則ち論語・学庸を重んじ、孟子を悪む。又仏教を重んじて道経無し。而るに若し古医書を見れば、則ち必ず買ふ。蓋し医を重んずるが故なり

と記しているが、元や明に入った邦人の間には中国に医を学び医書を求めたものが尠くなかったようで、一四八四年に入明した妙心寺の僧田代三喜は十二年在明し、李東垣(名は杲字は明之、金の名医)朱丹溪(名は震字は彦条、元の名医)一派の医術を学び伝えて帰国し、日本における李朱医学派の開祖となり、その弟子曲直瀬一溪(名は正盛、号道三)は之を継いで宋の医方を廃して新方を以てし、近世医術の中興の祖となっている。明の孝宗の時代に入明し張仲景の医術を伝えた阪浄運とか、一五三九年と一五四七年に策彦と共に入明し明の世宗を治療し帰国に当って医書を勅賜された吉田宗桂(意安)、一三六九年に入明し、道士金翁から医術の秘訣を伝え、洪武年間、時の皇后の出産に投薬して験あり、安国公の封を賜わり、一三七八年帰国した竹田昌慶とか、明の世宗の時、大内義弘の命で入明し針術を研究した金持重弘、或はまた南禅寺の僧で畠山義宣に派遣され明国で薬方を研究し、鄭舜功なる人を伴い帰って中国の薬方を伝えたという昌虎首座などがある。元の国が亡び明に仕えずして来朝、九州で開業した陳順祖、京都に来て將軍諸侯に厚遇された其の子の陳大年、大年の孫の陳祖田の如き名医は、当時の禅僧の間にも尊敬されている。(陳大年が元に仕えて礼部員外郎であったという所から、彼等を一樣に陳外郎ちんがいろうと称した) 武將の細川勝元は医術を研究し「靈蘭集」を編纂し、古今の医書を抜萃分門類聚し、和字を用いて観覧の便に供した。之は中国の医書に本

ずいて作られた日本医書の嚆矢である。その頃医書大全十巻か輸入され、阿佐井宗瑞の力で覆刻されたのか日本における医書開版の最初だといわれる。蔭涼軒日録や翰林五鳳集には薬品を中国に求めた記事があるが、日明交通によって漸次医薬の輸入の事実を知ることが出来る。

食物関係では饅頭・豆腐・砂糖が禅僧其他によって伝来され、美術工芸方面では、宋元風の幽玄瀟洒な水墨の手法が如拙・周文・宗丹・蛇足雪舟雪村等多くの人々の作品の上に取入れられ、建築では禅寺と邸宅との融合による一種の形式が造成されて唐様建築が興り、陶磁器に於ても明僧に伴随し帰朝した工人によって新機軸が発揮された。永正六年（一五〇九）了菴桂悟と共に入明した伊勢松阪の祥瑞の如き磁器の製法を伝えたことで知られ、茶道香道の流行と共に雅客の好みに応ずる新案が生まれたのも此の頃である。

また別の方面で此の時代に能楽の起ったことに触れておきたい。応永年間に結城次郎親阿弥と其の子、左衛門大夫元清世阿弥と二人によって在来の猿楽を改めて、元の雜劇に倣って曲節を定めた所謂謡曲なるものが現われた。謡曲と元曲とは形式が相似た所が多いという点で、元曲が直に謡曲の源流だと断定するには勿論異説があろう、けれども少なからざる影響を受けていることは想像される。そしてこの元曲は新井白石の俳優考にも言及しているように元明と往来した禅僧たちの移入したものと思われる。いま謡曲の中には禅的な思想を持ったものが多々あって、その主なものは禅僧乃至禅に趣味を持つ人の手に成ったと見られる向もある。山姥・江口の曲を古来一休禅師の作と言ひ、兼平、高砂は正徹の作と伝えるのも其の間の消息を語るものであろう。新芸術の能楽の生まれた後、音楽として三味線が這入っている。之は一般に琉球からの伝来となっているか、本は中国のものらしい。此の楽器

の流行は江戸時代の中期からであるが之によって我が国の芸能界に一生面を作ったことなど共に注意すべきことであらう。

この種の問題に就いては木宮泰彦師の日支交通史、中国王輯五著の日支交通史其他專家の研究に待つべく、この取るに足らぬ断想を綴るに忸怩たるものあるを知りつつ敢てした所以は、大方の学匠諸君子が特に衰老の一窮措大のために貴重な玉稿を寄せ賜わった学恩に感激し、またこの書の編集に神勞を惜しまず終始尽くされた花園大学の諸学士に対し、懇謝する寸衷に出たものとして亮察せられたい。